

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00468

研究課題名(和文)ギリシア悲劇とその時代におけるカロスの概念

研究課題名(英文)The Concept of 'kalos' in the age of Greek Tragedy

研究代表者

吉武 純夫 (Yoshitake, Sumio)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：70254729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：「カロス」というギリシア語は好適さを表す語だが、ホメロスの時代から古典期へと下るにつれて複雑微妙な使い方をされるようになっていった。「アガトス」という語との違いを念頭におきながら、悲劇におけるすべての用例を調査した結果、この語は、感銘を表す従来の働きに加えて、変転する状況や刹那的な事態の好ましさを相対的に表すことのできる語として発展し、不安定な状況を描く悲劇によって好んで用いられることとなった、という推論を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

悲劇においては「カロス」という語が非常に複雑微妙な使い方をされるようになっていたが、それを跡付ける検討は従来ほぼ皆無であった。この語の意味は、プラトン・アリストテレスやプロティノスに関する言説において哲学的な検討がなされるのみであった。その中で、本研究はドラマの中の生きた言葉の中でこの語がどのように用いられたかを、はじめて体系的に整理したものである。悲劇におけるこの語の全用例の修飾対象類別一覧は、今後の研究にも少なからず寄与するはずである。

研究成果の概要(英文)：'kalos' is one of the words that denote desirableness. From the time of Homer down to the Classical period it came to be used with complexity and subtlety. First I investigated the difference between this word and 'agathos', another Greek word for desirableness. Then I looked into all the examples of this word and its derivatives in all extant tragedies examining the object of their modification, and found out that 'kalos' developed into a word that can import, from comprehensive and relative point of view, the favourableness or unfavourableness of momentary situations and actions. That is why this word was particularly favoured by the genre of tragedy that habitually enacts precarious situations.

研究分野：西洋古典学

キーワード：カロス ギリシア悲劇 ホメロス アガトス

1. 研究開始当初の背景

好適さを表す言葉の一つである「カロス」およびその派生語(以下では「カロスの語」と記す)は、前8世紀のホメロス叙事詩から多用された重要な語であるが、その使用頻度を、優良さ・善良さを表す語である「アガトス」およびその派生語と比べてみると、前5世紀での悲劇におけるカロスの語の使用が他のジャンルにおいてよりも格段に大きいことが分かる。このことは、前5世紀の悲劇においても、カロスの語が非常に重要な評価の語であることの証左である。しかし悲劇においては、ホメロスの場合と比較してその意味と用法は少なからず違うものとなっている。そこにはどのような変化があったのか。このことに着目した研究は従来、ほぼ皆無であった。かつて私は、悲劇においてこの語が死を修飾するケースを徹底的に調査しその意味を考察して、その成果を2018年に『ギリシア悲劇と「美しい死」』という本にまとめた。しかし死を修飾する以外の用例は手付かずであった。そこで、悲劇におけるカロスの語の全用例に範囲を広げて、この語の使用状況と意味を考察することにした。

2. 研究の目的

ホメロスと悲劇の間には、カロスの語がどのような対象を修飾するかという傾向において大きな違いがある。すなわち、ホメロスにおいては、それがヒト・神やモノを修飾する場合は圧倒的に多く、コトを修飾するケースはごく僅かに限られていた。悲劇では逆に、ヒト・神やモノを修飾する用例よりもコトを修飾する用例が圧倒的に多い。これは何を意味するのかということが、目指す探求の一つである。そして、前8世紀のホメロスから前5世紀の悲劇にかけて、カロスの語の意味自体にも変化があったという可能性を探ることにした。また、カロスの語の使用が悲劇において顕著に多いということ自体の意味も探ることにした。それは悲劇というジャンルの性格自体とどのように関わっているか、ということを探ることでもある。

3. 研究の方法

まず下準備として、カロスという評価の言葉を、やはり好ましさを表す他の言葉であるアガトスという評価の言葉と比較することによって、その根本的な評価の構造を探り、カロスという概念の特性をあぶりだすことにした。また最も基本となる調査として、カロスの語の用例がどのように用いられているかを、恣意的な解釈に陥らぬように注意しながら考える、という作業を行なった。ホメロスと全現存悲劇のすべてのカロスの語の用例(324件と524件)について、カロスが何を修飾しているかを調べ、そしてそれらの修飾対象を類別することにより、どのような対象を修飾するカロスの用例がどれだけあるのかを明らかにすることにした。それらの準備をした上で、注目に値する用例を抽出し、同類の他の用例と比較しながら、そこでカロスの語に与えられている役割を分析していった。

4. 研究成果

(1)3名の悲劇作家から7作品ずつ選出した21作品において、カロスの語とアガトスの語の比較を行なってみると、分かったのは次のことであった。すなわち、主観的評価を表わすことは、カロスに比べてアガトスの方が一貫して少ない。外面的・相対的なよろしさを表わすことは、アガトスに比べてカロスの方が明確に多い。また、カロスと違ってアガトスは形容詞の述語的用法が殆どなくて、「アガトスだ」ということがメッセージの中心となることは殆どない。また、否定を伴って用いられることも殆どない。次に、これらの語が表わす<よろしさの程度>については、次のことが分かった。すなわち、アガトスは、「すばらしい・推挙しうる」という意味を表わすことが大多数を占める。そしてそれらは、話し手の判断よりも世間の一般的判定によるものである。いっぽうカロスは、「問題ない・標準的」を表わす場合と「すばらしい・推挙しうる」を表わす場合の数を比べてみると、ホメロスにおける場合と違って、どちらとも取れる両義的なケースが少なくない。カロスの用例で純粋に前者のみというケースは殆ど否定詞とともに用いられており、肯定されることは殆ど見当たらないが、純粋に後者のみというケースは少なからずあり、とくにエウリピデスにおいて比較的多い。アガトスは、大抵、確定的・安定的に望ましい状態にあるモノやコトを表すために用いられ、それは根本的・普遍的なよさが公認されるようなものを表わすことが通例である。それに対してカロスは、一面的な好ましさやよさを表わすことが少なからずあり、また否定を伴う形で全面的な否定を表わすこともある。それゆえこの語は、しばしば変転する状況や刹那的な事態の好ましさ(や拙さ)を表すための恰好の語となっている。以上のことから、主として不安定な状況を描く悲劇においては、アガトスの語を用いるべき事例は多くないが、カロスの語を用いるべき事例にはこと欠かかない、という推論が導かれた。カロスとアガトスの構造的な違いとして指摘しうるのは、カロスの場合、記述的陳述の鍵となる評価基準を構成するのは、標準というべきものよりもケースバイケースな期待値であ

る、と考えるのが妥当である。カロスが相対的評価を表すものと一概に言うことは決してできないが、相対性と深いかかわりを有するものだとまとめることができる。

(2)ホメロス叙事詩と現存悲劇のカロス語の全用例について、それが修飾している対象を明らかにし、それを<ヒト・神>や<モノ>や<コト>や<不定法動詞>などに分類して一覧できるようにして、カロスの語がどんな対象にどれだけ適用されているかを作家ごとに調査した結果としては、まず、ホメロスと悲劇の間において、カロスの語の使われ方に顕著な違いが確認できた。最大の違いは、ホメロスにおいては大多数を占めていた<神・人>や<モノ>への適用が、悲劇においては(エウリピデスを除き)非常に少なくなっており、かわりに<コト>への適用が大半を占めるようになってきていることである。それもとくに副詞の形で動詞を修飾するケースが多数見られるようになり、エウリピデスでは夥しい数に上っている。カロスの語が担う意味としては、単純に感性的に好ましいという評価と、何らかの基準を念頭に「~として似つかわしい・妥当だ」という評価とがあるが、悲劇においては両者がいつも独立背反しているわけではなく、混じり合っている事例も多いということが重要であり、ホメロスからの変化でもある。感銘や倫理性を表す場合もあるが、損得も含めた好ましさの総合的判断を表す場合も見られる。そしてエウリピデスでは醜聞や流血にもこの語が適用されるなど、途方もない転用も散見されるが、それにもそれなりの理由が考えられた。とくにエウリピデス『バツカイ』におけるカロスの語の自由闊達な使用ぶりが特別な注目に値する。そこには、カロスの語の変質をも言うべきものが見出されるということ、論文にまとめて1年以内に発表する予定である。

(3)カロスの語が悲劇で好まれたことの主要な理由は、一々の動作や事態を修飾する副詞的用例に代表されるような、刹那的状况に対する評価として、また劇中の諸事態に対して感性を交えた咄嗟の評価として使いやすい語となっていたからであった、と結論することができそうである。

(4)この研究からはたくさんの発見がもたらされた。その成果は一つ一つ論文にして発表してゆくが、その議論の多くは解釈に立ち入るため、主観に左右される可能性も否めない。その点から考えると、調査結果として共有するのにより相応しいのは、解釈の入り込む余地のより少ない基礎データであろう。その考えのもとに、ホメロスと全悲劇におけるすべてのカロスの語の修飾対象を類別し一覧にした調査結果を、この研究実績報告書の付録として、オンラインのストレージに保存し、閲覧できるようにした。その表題とURLは次の通りである。印刷やダウンロードを希望する場合は、吉武に問い合わせられたい。

「ホメロスと現存悲劇作品におけるカロスの語 修飾対象で類別したその全用例 」(2023)
<https://drive.google.com/file/d/1eb6H2ygJn3aWq04QgUjpbUE7NBWQbrp/view?usp=sharing>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉武純夫	4. 巻 XXVI
2. 論文標題 テウメーソスの奇蹟 その石化の意味	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋古典論集	6. 最初と最後の頁 27-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 栗原麻子・吉武純夫・木曾明子（共訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 448
3. 書名 デモステネス弁論集 7	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>オンラインストレージに公開した研究成果報告書への付録 吉武純夫「ホメロスと現存悲劇作品におけるカロスの話 修飾対象で類別したその全用例」(2023) https://drive.google.com/file/d/1eb6H2ygJn3aWq04QgUjpQbUE7NBWQbrp/view?usp=sharing</p>

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------